戦争責任に関する信仰宣言

私たちは昨年の第 41 回年次総会において、「日本バプテスト連盟結成 40 周年にあたっての声明」を採択し、連盟 40 年の歩みについて深い感謝と悔い改めを表明した。

天皇の代替りなどをきっかけとして、新しい装いをこらした天皇制国家が台頭するきざしが日増しに強くなっている今、私たちは、バプテスト宣教 100 年周年の記念すべき時を迎えようとしている。

この時にあたり、神が私たちの先達を通して与えてくださった数々の恵み、祝福を感謝し、新たな希望をもって宣教 200 年に向かって前進していくために、神と人々に対して私たちは以下のように戦争責任を告白するものである。

私たちは、主イエス・キリストの十字架と復活において私たちの罪を審きつつ赦す解放の福音にのみ聴き従う。主イエス・キリストこそ教会と世界の主であり、私たちはみ子イエスから父なる神の支配を語り、この世界を神の被造世界として受け取ることが許されており、またそうするように命じられている。

しかし、かつての大戦下、私たちは、まさにこの主告白において誤りを犯した。すなわち私たちはこの世界に主イエスの支配の及ばない領域を認め、「神社は宗教にあらず」と強弁しながら天皇を「現人神（あらひとがみ）」とする天皇制国家とその侵略戦争を教会と両立できるものとし、しかも戦争遂行に加担して隣国の人々に対し、神社参拝を強要するような誤りさえ犯した。

このような状況の中で私たちは、二元論的あるいは道徳主義的福音理解にとどまることによって、信仰の内面化と体制的教会の保持を図ろうとした。そして私たちは、生の全領域に及ぶイエス・キリストの義の支配を十分に語らず、「隣人の家をむさぼってはならない。」（出エジプト 20･17）という戒めを聴くことも語ることもしなかった。

私たちは、この大戦がまさに明治以来の富国強兵政策の「力」の絶対化と「むさぼり」の行きつく結果であったことをわきまえようとせず、「八紘一宇」のスローガンが偏狭な民族エゴイズムに過ぎず、天皇制が「むさぼり」とそれを生み出す差別とを正当化することを見抜けなかった。そして、信教の自由・政教分離を主張すべきバプテストでありながら、かえって国家を神の国と同一視し、アジア侵略を神が祝福される領土拡張として単純に受け入れた。

そして私たちは、「むさぼり」が今日においてもアジア諸国の民衆を抑圧するばかりか自らの生をも歪めていることを知りながら、未だ福音に応答する「平和を造り出す者」の生き方を実現できないでいる。

私たちは深い痛みをもって自らの罪を告白する。また、私たちは、天皇制国家が持っている問題性について十分に問うことをせず、その体質を引き継ぐことによって、主告白をあいまいにしていることを自らの罪として告白する。

どうか恵みの神が私たちの罪を赦してくださるように。

また、天皇の代替わりにおいて、新しい天皇制国家が装われつつある状況の中で、主イエス・キリストのみが教会と世界の主であるという教会本来の告白に立ち、ふたたびそのあやまちをくりかえすことがないように。そして、そのことが、私たちの喜びと希望となり私たちの告白の課題であり続けるように。

1988 年 8 月 26 日

日本バプテスト連盟　第 42 回年次総会